産経新聞　朝刊　和歌山版　2023年11月5日

くじら日記

太地町立博物館から

「クジラ博士」のセミナー①

アザラシからトド、鯨類研究に

「くじらの町」太地に奉職する者は、クジラへの強い思いを持つとともに、知識も深めなければならない―。

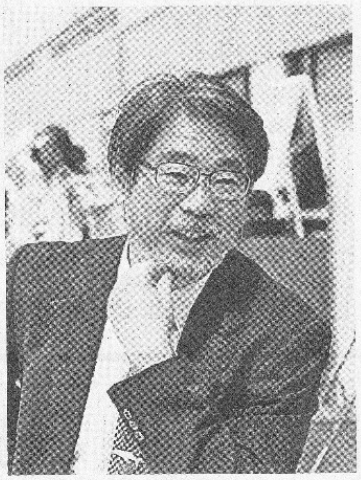
そんな太地町の方針のもと、9月に町立くじらの博物館などで2日間にわたり開かれたのが、くじらの博物館の名誉館長、加藤秀弘先生（東京海洋大学名誉教授、日本鯨類研究所顧問）による職員研修「太地町鯨セミナー」です。加藤先生は「クジラ博士」とも呼ばれる専門家で、先生の波瀾万丈な逸話の数々に、参加した職員は引き込まれていきました。

冒頭で、加藤先生はクジラの研究者になるまでのエピソードを紹介しました。

先生は、北海道大学の学生の頃、アザラシを研究対象にしており、相当に年季の入ったトッカリ船（アザラシ捕獲の船）に乗り込み、オホーツク海のサハリン沖に向かったことがあります。船上では飯炊きなど雑務をこなす傍ら、捕ったアザラシの皮を剥ぎ、毛皮の整理をしながら研究用サンプルを採集しました。とりわけ過酷だったのが飲み水の確保で、流氷の上に飛び乗り、雪解け水をポンプでくみ上げたそうです。

その後、漁場が制限される経済水域200リの時代に入り、研究の対象はハンターが捕獲するトドに変わりました。ハンターが拠点とするトド小屋に一人で通い、解剖などを手伝う一方で、サンプルを集めました。あるとき、路面が凍る国道で、トドの大きな胃袋を積んだリヤカーを引いていると、突風にあおられて転び、斜面に落ちました。先生は幸い、先に落ちた胃袋がクッションの役割を果たして事なきを得ましたが、この体験が、その後の人生を考える契機となったそうです。

以降も紆余曲折があったそうですが、鯨類研究所（現・日本鯨類研究所）に入所し、鯨類研究者の第一歩を踏み出すことになったといいます。



「クジラ博士」として知られる鯨類研究者の加藤秀弘氏＝平成28年（いずれも本人提供）

当時のことは、先生の著書「クジラ博士のフィールド戦記」に、臨場感たっぷりに描かれており、先生のクジラ人生を知ることができます。

くじらの博物館の歴史も、先生なしには語ることができません。くじらの博物館ではシロナガスクジラ全身骨格のレプリカが2005（平成17）年に完成しました。このレプリカの解説パネルには「複製・展示監修：加藤秀弘」の文字が刻まれています。当時、水産庁遠洋水産研究所鯨類生態研究室長だった先生と、ノルウェーとの共同研究の一環で、国内に3体しかないレプリカの1体の展示が、太地でかなったのです。

アザラシを調査する加藤秀弘氏＝昭和49年

原骨格はノルウェーにあるトロムソ大学（現・UiTノルウェー北極大学）の博物館所有ですが、現在は山口県下関市立しものせき水族館「海響館」で借用展示しています。

2006（平成18）年には、太地町沖のイルカ追い込み漁で捕獲されたバンドウイルカの群れの中から、本来あるはずがない、お腹に一対の「ひれ」をもつイルカが発見されました。その腹びれは、クジラの祖先が陸で生活していた頃の後ろ脚と関係があると考えられ、「先祖返りしたイルカ」として学術的にも注目を浴びました。その時、加藤先生は東京海洋大学海洋環境学科教授として、飼育研究の指揮をとったのです。

実は、加藤先生が太地町に駆けつけたとき、筆者も加藤先生の東京海洋大学鯨類学研究室に所属する学生として同行していました。加藤先生は筆者の恩師でもあったのです。

「クジラ博士」の鯨セミナー。筆者にとっては17年ぶりの講義となりました。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

原則第1日曜日に掲載します。「太地町鯨セミナー」の内容を2回にわたり紹介します。